日本人の海藻利用
—神代への旅—

濱　田　　仁
富山大学医学部

Ⅰ. はじめに

四方を海に囲まれた日本では，人々は古来魚介類とともに海藻を採集して生活を営んで来た。海藻は食料としてだけでなく，製塩(ホンダワラ類)，薬（マクリ，ミルなど），洗い張りや漆喰の材料(フノリ類など)，子供の遊び（フクロフノリ）などにも用いられ，その果たした役割は意外に大きい。また，海藻は古事記や日本書紀，出雲國風土記（733）に出て来るだけでなく，万葉集や源氏物語などにも登場し，日本文学上も重要である。

また，今日残る多くの古社の創立は有史以前，つまり神代の時代にさかのぼるが，海に近い古社では海藻を用いた古い神事や祭礼が見られる事が多い。特に，ホンダワラ類はお祓いに，ワカメやコンブは新年の祝賀などに用いられ，当時の日本人の日常生活，精神生活が再現されて，貴重である。彼等の哲学や宗教を現代の生活に生かせればと思う。

Ⅱ. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社

神道ではケガレ（気【け，つまり気力】の枯れる事）を祓い心身を清浄に保つことは重要で，その為にお祓いや潔斎を行う。今日お祓いには榊の枝や木の棒の先に紙や麻を垂らした大麻(おぬさ，図1）を使う。ところが，島根県では神事や忌明けの際，大麻の代わりにホンダワラ属の海藻（潮草【しおぐさ】又はジンバと言う。図2）を用いる神社がある。松江市の佐太神社（図3）や大田市の五十猛神社の様な少なくとも千数百年を越える古社で，これらの神社では大麻で祓う代わりに潮草でお祓いをする神事がある。生命力に溢れ，清浄な海を象徴する潮草でお祓いをしたのが，後に内陸でも便利な大麻に代わったのではないだろうか。海藻が神性を有していた事は，日本書紀第九巻，気長足姫尊(おきながたらしひめのみこと)，つまり神功皇后（じんぐうこうごう）の項に見られる。即ち，「水底（みなそこ）に居て，水葉(みなは，海藻）も雅（わかやか）に出で居る表筒男（うわつつのを），中筒男，底筒男の神」とあって，表筒男ら綿津見（わたつみ，海の）三神の美称として，海藻が若々しく雅に繁茂する様を冠している事からも明らかであろう。また，今日多くの神社で神饌（しんせん，神様の食べ物）として海藻が用いられる事からも，海と海藻が清浄

図1　お祓いに使う大麻（おぬさ）。神主が手に持つ，白い紙の下がった棒が大麻。

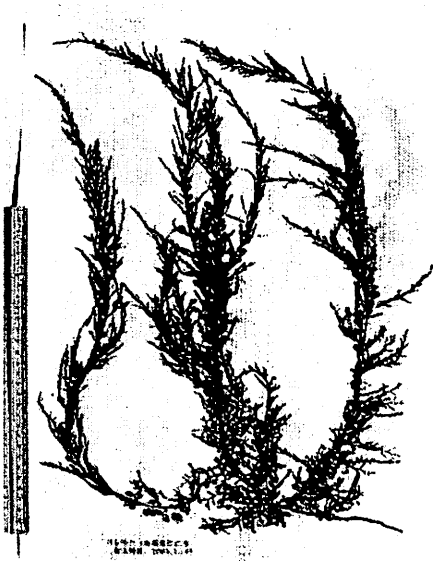

図2　出雲地方でお祓いに使われる潮草（しおぐさ，ホンダワラ類）の一種，ヨレモク。

で生命力を持った特別の対象であったと理解出来る。

ここでは，まず佐太神社の神事「古式祭」と周辺の宗教的風俗，その歴史的背景に触れたい。なお，ここでは，ホンダワラ属の海藻を，原則として学術的な場合はホンダワラ類，お祓いに関する場合は潮草，食べ物や五穀豊穣に関してはジンバと記す。

1．佐太神社の歴史と宮司家・朝山氏

出雲國二宮・佐太神社は，出雲國風土記（733）や延喜式（藤原時平・藤原忠平927）にも載る格式高い古社である。松江市中心部から北西へ車で20分。豊かな農村風景が広がる朝日山の麓に，三殿並立といって大社造りの三神殿が横に並ぶ（図3）。約200年前に建立された珍しい建築様式で，1982年，国の重要文化財に指定された。やや大きい中央正殿には佐太大神（さだおおかみ）ほか4座，向かって右の北殿には天照大神（あまてらすおおみかみ）他1座，左の南殿には須佐之男（すさのお）尊と秘説四座が祀られる。この神社では長い歴史を反映して，国津神の佐太大神の他に多数の天津神が祀られている。また，境内手前の広い駐車場からは弥生式土器が出土し，付近には縄文時代の遺跡もあり，この神社の創立も歴史以前に遡る。

現宮司は朝山家45代の朝山芳圀（よしくに，国構えの中の「方」は「土」が正字）氏。朝山家の祖は古代随一の豪族で軍事を司った大伴氏だが，中央での勢力を藤原氏に奪われ，承和3年（836）出雲介（国司）として出雲に下った。やがて神門郡朝山郷に城を構えて朝山氏を称し，室町期には出雲10郡のうち3郡半を支配し，祭祀も司った。その後，太閤検地により所領の多くを没収され，祭祀だけを行う様になり，明治以後さらに神職の数を減らされ今日に至る。

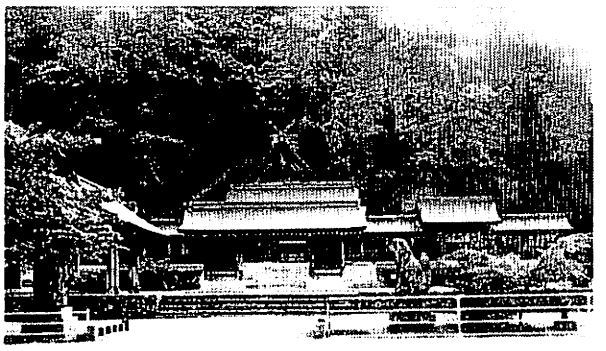

図3　佐太神社（重要文化財）全景。

2．忌明けのお祓いと潮草

佐太神社には，門の前の石段下に，参拝者がお祓いに用いた潮草を置く潮草架けがある（図4）。潮草は，島根県ではジンバ・ジンバソウ・ジンボ・ジンボサなどと言い，佐太神社でもジンバまたは潮草と言う。何故，潮草を潮草架けに架けるのだろうか？朝山宮司に依ると，佐太神社で日常の神饌（しんせん，神様の食べ物）に使う海藻は，ノリ・ワカメ・コンブぐらいだが，お祓いには潮草を使う。身内の不幸の後，仏教で49日，神道で50日の忌が明けるとかなり遠くからも参拝者がある。その際，遺族は海に行って海水で口をすすぎ，手を洗い身を浄める。その後，潮草と竹製の潮筒（しおづつ，潮汲みタガ，潮タガ）に入れた海水を浜から神社に持参し，潮草を軽く海水に浸け，扇子で扇ぐように左・右・左と潮草で自分を祓って身を浄める。その後，潮筒の海水で手を洗う。昔は，潮草を架けたり，潮筒を置く場所がなく，潮草は神社の柱か壁に打った釘にかけるか，賽銭箱の隅，欄干などに置いた。しかし，建物も傷むので，佐太神社が重要文化財に指定された1982年頃に潮草架けが出来，潮筒を架けるようになった。佐太神社の他には，例えば松江市内の武内神社・売布（めふ）神社・神魂（かもす）神社・八重垣神社等の古社で氏子が潮草でお祓いをしており，石見の大田・浜田・益田でも潮草を使う神社がある。佐太神社ではこの風習が特に盛んで，縄文・弥生・古墳・中世と続く遺跡も多く（後述），祖先の祀りやお祓いの原型を今に伝えているようだ。ところが，同じ出雲でも出雲大社・日御碕神社などでは潮草でお祓いはせず，大麻を

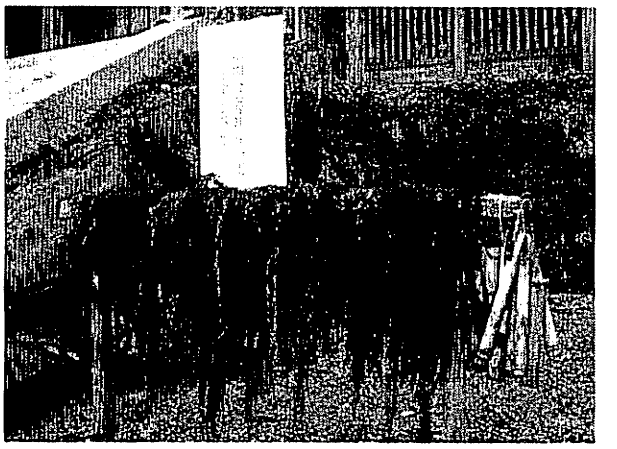

図4　佐太神社の門の前の石段下の，潮草架けに掛かる潮草と竹製の潮筒（しおづつ）。潮草で身を祓った後，潮筒の中の海水で手を洗い浄める。

使う。

3．潮草の種類

それでは，佐太神社で使われる潮草の種類は何だろうか？ 潮草架けにかかる潮草を標本にして調べると，アカモク，ジョロモク，トゲモク，ノコギリモク，ホンダワラ，ヤツマタモク，ヨレモク（図2）のホンダワラ属7種と，一見ホンダワラ属の海藻にそっくりで刺胞動物（腔腸動物）のクロガヤも見られた。クロガヤは群体をなし，触れると痛い。しかし，ウミトラノオや最近DNA解析からホンダワラ属に移されたヒジキ属のヒジキ（Stiger *et al.* 2003）は，数度訪ねたが，いつもお祓いには使われていなかった。

お祓いや神事に使った潮草は，例えば正月15日のドンドや神社の焼却炉で燃やす。昔は田舎の十字路に御神木を立て，正月に神様にお供えした注連縄（しめなわ）やお札と一緒に潮草を燃やした。決してゴミ箱には捨てない。

4．神事と潮草，燧（ひきり）神事

佐太神社では，お祓いに潮草を使う風習の起源を示すと思われる神事がある。佐太神社の年間行事中，最古で最重要の御座替（ござがえ）神事で，起源は平安期以前と伝わる。神々が鎮座する一畳位の御座を取り替える神事で，古い生命に代わり新しい生命を迎える神事でもある。旧暦の8月19日から24日，新暦になってからは9月19日から潔斎が始まり，24日夜に御座を取り替えるが，この間のお祓いに潮草を使う。

9月19日夜，宮司は弥生時代の遺跡に近い古浦（こうら）海岸で禊ぎをした後，潮草と海水を入れた潮汲み桶を持ち帰り，家族と離れて一人社務所にこもり，潔斎を始める。潔斎中の宮司と神様の食事の火を毎朝おこすのが，古代の発火法の燧（ひきり，図5）である。燧は新年や新生命を迎える重要な神事だが，御座替え神事でも行われる。御祈祷所の入り口には小さな潮草が潮汲み桶の上に置かれ，中に入る時，神職達は潮草で自分自身を左・右・左と扇子で扇ぐように祓い浄め，参列者の私も祓われた。島根県大田市の五十猛神社で，正月15日の神木（せんぼく）さん（ドンド）の祭で行われるお祓いの方法と同じだが，佐太神社の潮草は15cm程度と短く，潮汲み桶も小さい（図6）。

燧に使う燧臼（ひきりうす）は4 cm×40 cm程のヒノキの板で，その縁には直径1 cm弱の穴が空けてある。燧杵（ひきりきね）用のウツギは直径約1cm，長さ約30 cmの棒である。同じ燧でも，出雲大社の燧臼のヒノキはまな板の様に大きく，燧杵のウツギは約80 cmと長い（小泉八雲 1894）のとは異なっている。

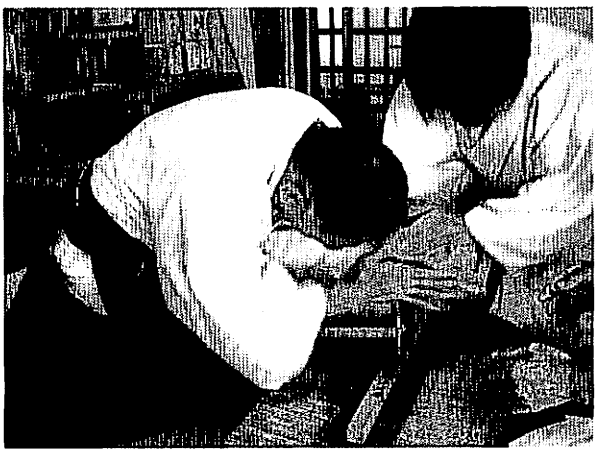

図5　佐太神社で行われる燧（ひきり）の様子。

図6　御座替え神事の際の潮草と潮汲み桶。

火を起こすには，一人の神職が燧杵を燧臼に空けた穴に入れ，両手で激しく揉んでこすり合わせ，両手が下の燧臼に達すると，次の神職が上から同様に揉み始め，順々に3人が燧杵を揉んで燧臼と摩擦させる。10分程して下に溜まった燧杵と燧臼から出た黒い粉が熱を帯びる。硫黄を塗った薄い竹べらを差し出し，ポーッとついた火を蝋燭に移し，蝋燭を提灯に移すと，風が吹いても火は消えない。神様と宮司のカマドは別の火で炊くので，小休止の後，再度同じ作業を行ったが，今度は調子が悪く40分程かかった。皆，手のひらに豆が出来，豆がつぶれた人もいる。古代の伝統的神事の継承は，古代の生活を現代に行うことで，楽でない。

5．御座替え神事と例祭

御座替え神事は，佐太神社の神事の中で最古で最重要である。9月19日から宮司を含め神職4人

がその任に当たるが，24日の夜は7～8人で行う。私が参列した御座替神事は2006年9月24日夜8時からだった。旧暦24日の月の出は夜半，闇夜だが，当夜も闇の中，三神殿が厳かに建つ。数十人の見学者が境内の「舞殿」の周囲に集まり，御座替神事と同時進行中の佐陀神能（能と神楽を合わせた演劇で国の重要無形文化財）を見学している。神殿の門の入り口には，潮筒と潮草を置き，神職は先ず自らの身体を潮草で祓い浄めて中に入り，本殿を祓い，我々特別参列者も祓いを受けて中に入る。神殿と神殿の間の敷地では高さ1 m 程の鉄製の篭の中で薪を焚き，周囲を暖め，明るくしている。朝山宮司と数名の神職は，まず南殿の前で祝詞（のりと）を上げ，御座替えを行う（図7）。宮司を先頭に神職達が階段に上る。神職により階段の高さが数段ずつ違う。暗い中，宮司は提灯1つで神殿の奥に入り，前年の古い御座を持ち出す。御座は階段に並ぶ数人の神職を順に経て下に降ろされる。

続いて今年刈ったイグサで作られた新しい御座が，今度は逆に階段下の神職から順に数人の神職を経て宮司に渡され，宮司はそれを神々に供える。因みに，御座の原料のイグサは既に1100年以前には栽培され御座が作られたようだ（深根 918）。御座替は，南殿の次は北殿，最後に正殿で行われた。この厳粛な神事では，人も建物も御座も総てを潮草で祓い浄め，午後10時半頃に終わった。その後，宮司さんのお宅で楽しく賑やかな直会（なおらい）が始まり，夜半過ぎまで宴は続いた。

翌25日の例祭は，元来，御座替え神事が無事に終わった事を祝う祭で，佐陀神能が舞われ，潮草を使わず大麻で祓う。つまり，平安時代以前に遡る最重要の神事では伝統的な潮草で祓い，より新しい他の神事では新方式の大麻が使われる。朝

図7　深夜，本殿で行われる御座替え神事の様子（神社提供）。

山宮司は，「潮草でお祓いをする起源とその中心地は出雲の佐太神社」だと推測されている。

6．佐太神社周辺の歴史とお祓いの起源

縄文期以来，宗教的で豊かな土地：

神社の近くには，縄文前期から古墳期にかけての佐太講武貝塚（1933年 国指定史跡）がある（図3）。縄文時代は今より概して温暖で海水面も高く，汽水湖である宍道湖は佐太神社付近まで入り込んでいた。魚介類，特にヤマトシジミ，獣骨，土器，金属器等が出土し，朝鮮半島や日本各地との交易が盛んであった。弥生式土器，土師器，須恵器，玉未製品などが佐太神社駐車場付近の佐太前遺跡から出土している。日本海沿いの古浦（こうら）砂丘遺跡からは弥生前期の朝鮮系人骨60体が出土し，うち5体は銅板を頭に巻いて骨が緑色に染まったシャーマンとみられる男性であった。占いに使った鹿の卜骨（ぼっこつ）も出土し，彼等は宗教を持っていた（鹿島歴史民俗資料館，丹羽野輝子氏私信）。志谷奥遺跡からは青銅器製の銅剣6振り，銅鐸2個が出土した。古墳時代では，奥才古墳群などがあり，青銅器の武器や勾玉・管玉などが出土している。また，堀部遺跡からは縄文から中世に至る遺物が連続して出土している。このように，佐太神社を中心に半径5 km 以内には縄文期以来の100個所を越える遺跡が密集する（鹿島町教育委員会 2001）。奈良時代の古事記（712）や特に出雲國風土記（733）には，人だけでなく，海・山・川，海藻を含む動植物が頻繁に登場し，奈良時代のみならず，それ以前の歴史的背景を感じるが，記述の一部は考古学的証拠からも明らかになりつつある。神社周辺には縄文期以来，人々の豊かで宗教的な暮らしがあり，連綿と現在に続いている。

ところで，お祓いにおける潮草には五穀豊穣祈願の意味はないが，ジンバの持つ小さな浮き袋は米粒を付けた稲穂に似るので，稲穂に見立て，五穀豊穣を祈願する。今でも日本では，正月に三宝の上に半紙・ウラジロ・コンブ，ホンダワラ，米粒の付いた稲穂，大小の鏡餅・茎葉の付いたダイダイなどを積み重ねて床の間に飾り，その年の幸福と一家の繁栄を祈る家がある。佐太神社周辺では，戦後暫く，正月前に行商の魚売りがジンバも一緒に売りに来た。一般家庭では元日から7日まで，天井からヒモを垂らして竹を横にぶら下げ，そこに弥次郎兵衛の様にジンバ・コンブ・鯛・大根・蕪をぶら下げて歳神様（としがみさま）にお供えし，五穀豊穣を祈った。しかし，朝山宮司家では，折敷（おりしき）と呼ぶ，足のない三宝に，

正月前から大根・蕪・コンブ等を載せて供え，ジンバは供えない。出雲人も，中央から来た朝山（大伴）氏も各自の伝統文化を守り，双方が現在に伝わっているようだ。

古来，朝鮮半島や済州島ではホンダワラを含め，非常に多量の海藻を食べた（バード 1897）が，儒教国の朝鮮では海藻を清浄視する考えは邪教だとされた。日本では壱岐・対馬や島根県全域，輪島のような日本海側の古い港町でホンダワラなど多種の海藻を現在も食べる。古代日本人は，海藻や魚介類を無尽蔵に生み出す海は清浄で生命力に溢れていると考えた。また，食べられる物は清浄という理念で，ジンバも，昔はジンバを燃やして作った塩も清浄で，これらはケガレを祓い，浄め，再生させる力を持つと信じられた。実際，宮城県の塩竈神社末社の御釜神社では，ホンダワラ属のアカモクを使った古代の製塩法が神事となり，今日に伝わっている。

Ⅲ. 福岡県・宗像大社の古式祭とアカモク

次に，福岡北部の宗像大社を訪ね，約850年の伝統ある収穫祭，「古式祭」に参加したところ，「ゲバサモ」（ホンダワラ属のアカモクのこと）が神前に供えられ，氏子達も食べていた。この神事を紹介し，「ゲバサモ」の神事での意味や語源について考えたい。

1．海人（あま）族と宗像大社

玄界灘に臨む福岡県北部には，古来，海を生活手段とする海人が住んでいた。古事記や日本書紀，万葉集にも志賀（しか）や糸島の久米の海人などの名が見える。ムナカタ（胸形，後に宗像）はその中の一族で，胸に入れ墨をして海に潜ったといわれる。宗像大社に祀られる神の誕生については古事記（712年），日本書紀（720年）の他，宗像大社の伝承もあり，神名の漢字表記や神殿の場所など一部で異なるが，古事記ではほぼ次のようになる。

天照大神は，根の国（海の彼方の穀物や富の源泉の世界）へと赴く須佐之男命に邪心がない事を試す為に彼の剣を貰い受けて3段に折り，天之真名井（あめのまない）で浄め，噛み砕いて口から吹き出すと，まず沖ノ島（図8, 9）の奥津宮（沖津宮）に鎮座する多紀理毘賣命（たきりひめのみこと），次に天之真名井のある大島の中津宮（図10）に鎮座する市寸島比賣命（いちきしまひめのみこと），最後に宗像市田島の辺津宮（へつみや，図11）に鎮座する多岐都比賣命（たきつひめのみこと）の三女神が生まれ（舎人親王 720），大国主命6世の孫とされる胸形君（むなかたのきみ）が三女神を祀った。

この様に，宗像大社は3箇所の社殿から成り，辺津宮から北西へ4 km弱の神湊（こうのみなと）

図8　宗像大社関係地図。

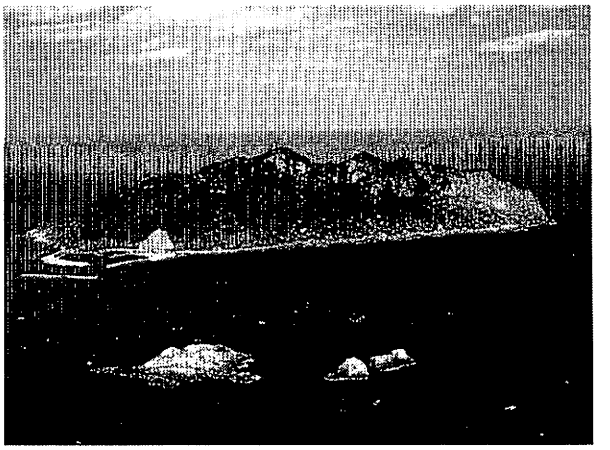

図9　宗像大社の沖津宮がある沖ノ島（宗像大社提供）。

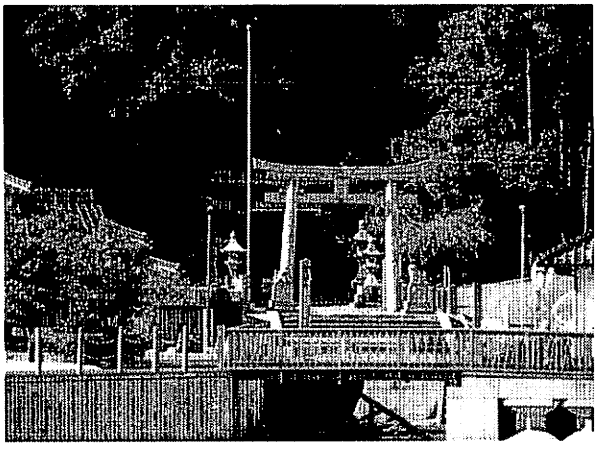

図10　海から見た（筑前）大島にある宗像大社の中津宮。

図11　宗像市田島にある宗像大社の辺津宮（へつのみや，国宝）。

から船で北西へ約7 km沖の大島に中津宮，更に北西へ約50km離れた沖ノ島に沖津宮があり，3社はほぼ一直線に並び，その先に朝鮮半島東南端の釜山がある（図8）。

沖ノ島は古来神聖な島とされて神職に守られ，現在でも女人禁制の島である。これまで3度の調査によって23箇所の祭祀跡が確認されたが，4世紀後半から10世紀にかけて大和朝廷が祭祀を行ったとされている。かつて遣隋使や遣唐使，百済や新羅への航路としてこの海域は重要で，精緻な金細工品や銅鏡，金銅製の馬具，子持ち勾玉，ガラス製装飾品やペルシャ製カットグラスなど，当時の一級品が沖ノ島から出土し，宗像大社の神宝館に展示されている。沖ノ島が海の正倉院とも呼ばれる所以である。

日本書紀には胸形君徳善（むなかたのきみとくぜん）の娘の尼子娘（あまこのいらつめ）が，天武天皇の妃となり高市皇子（たけちのみこ）を産んだとある（舎人親王 720）。航海や漁労の技に長けた玄界灘の海人族の中で，宗像氏は大和朝廷との結びつきを深めて力を伸ばした。鎌倉時代の元寇の際には自ら戦って御家人となるなど，宗像社は歴史の波にもまれながらも地元の神として厚い信仰を受けて今日に至っている。

2．古式祭

海の神を祀る宗像大社の祭りの中でも，「古式祭」は歴史のある特別な神事である。旧暦では11月15日であったが，現在は12月15日に近い日曜日の早朝5時半から神職に依る神事が拝殿で行われる。2008年は12月14日であった。その年の収穫物を神前に供え，神と共に食事を戴く御座（おざ）は境内の清明殿で行われる。午前6時から一番座が始まり，1号から50号までの50人が

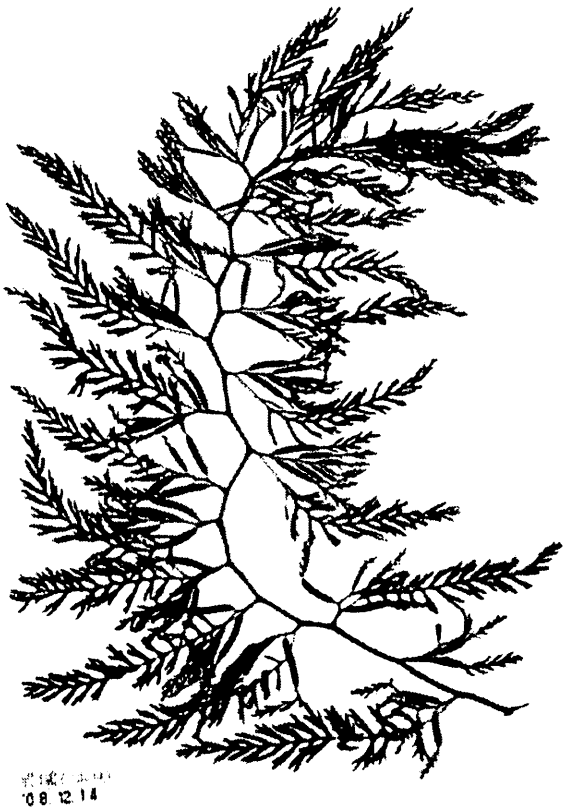

図12　江口の浜で採集された「ゲバサモ」（アカモク）。

御座の新莚（にいむしろ）に着座して行われる。40分程すると二番座となり，次の50人が食事を共にする。こうして，三番座か四番座迄続く。その用意は，神社の氏子が食材を集めたり，料理を作ったり，栗の木で箸を作ったり，御座に参加する者から費用（千円）を徴収して順番に宮座証を渡すなど，分担する。中でも，神湊に近い江口の村人は，江口の浜で神饌（しんせん，神様の食事）の「ゲバサモ」（図12，ホンダワラ属のアカモク）を採って来るが，毎年一番座で，神職の両隣の特別席に座る。古式祭において，如何に「ゲバサモ」が重要な意味を持つかが分かる。

神饌は神棚に近い奥に，米・塩・酒・野菜・果物などが供えられる（図13）。手前中央には，菱餅・九年母（ミカンの原種）を挿した竹串とウラジロを，蕗で包んだ山芋に突き刺し，それを折敷（おしき，四角い台盤）の四隅に配し，それらを紐で結んで四角く囲い，中央に「ゲバサモ」を置いた，いわゆる「御菓子，おかし」が供えられる。

50人の参会者が着席すると，太鼓の響きと共に「御座」の神事が始まる。祝詞，木綿幣でのお祓い，茶碗の塩湯を振りかけるお清め，全員で古歌「千早振る第一（ていいち）の宮の木綿襷（ゆ

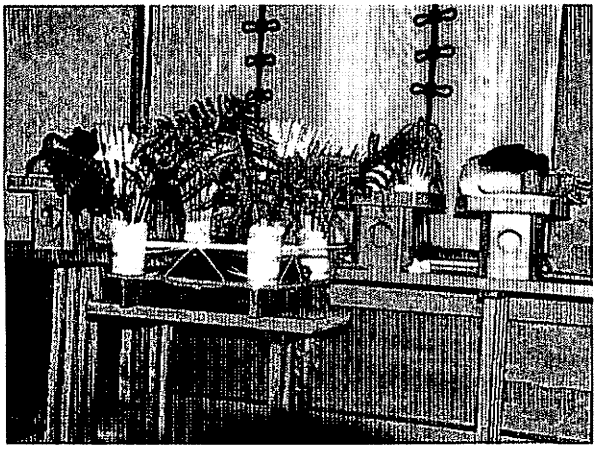

図13　神様に供えられた神饌。奥には通常の神饌が5つの三宝上に置かれ，手前には古式祭特有の「御菓子」が供えられ，その中央に「ゲバサモ」（アカモク）が盛られている。

図14　御座の光景。神職がゲバサモ（アカモク）の料理を配っている（宗像大社提供）。

うだすき）掛けての後は楽しかりけり」の唱和が第三（ていさん）まで続く。次いで神職による玉串奉納，宗像地方の各区長によるサカキの奉納の後，お神酒が注がれ，一同これを戴く。ここでお椀に汁が給仕され，折敷に添えられたクリの枝の箸を用いて会食となる。我々50人が一緒に食べる御座（おざ）の食事は，稲穂を立てた山盛りのご飯，煮物（根菜類・揚げ豆腐・かまぼこ），味噌田楽（豆腐・ノシアワビ）の九年母添え，なます（根菜・いりこ），菓子（菱餅）が並び，白酒，味噌汁（出昆布・豆腐・薄揚げ・大根・里芋）もある。会食の中頃，神職が「ゲバサモ」と大豆を煮て味噌で和えた料理（図14）を箸で一つまみずつお椀の脇に置かれる。食べると，アカモクらしい粘りはないが，シャキッとした歯ごたえとほのかな磯の香りがあった。アカモクと味噌は相性が良いようだ。食事が済むと〆の太鼓が打ち鳴らされ，「御座」は終了した。

氏子の話によれば，この時期，江口の浜には必ず「ゲバサモ」が打ち寄せられ，採れなかった年はないそうだ。しかし，近年，ホンダワラ類はどれも少なくなり，特に「ゲバサモ」は少なくなっているそうで，将来心配である。実際，帰りに江口の浜に立ち寄りアカモクを探してみたが，非常に少なく，殆どがトゲモクであった。アカモクは激減している上に，神事用に取り尽くしたのかも知れない。また，別の氏子に依れば，吸い物や味噌漬けにして食べるカジメは，沖ノ島周辺のものは上物だが大島のものは苦味があって少し落ちるそうだ。図鑑を示したところ，沖ノ島の海藻はカジメで大島の海藻はアラメであった。地元の人は分類上の違いを味の違いで識別していた。因みに，沖ノ島のカジメは今ではなくなってしまったそうだ。

3．古式祭における「ゲバサモ」の意味

なぜアカモクが特別に扱われ，供えられるのかについて，楠本（2008）は以下の様に説明している。『祭の早朝，「ゲバサモ」が届けられ，神饌が整ってから祭が始まる。つまり，「ゲバサモ」がないと古式祭は出来ない。それは，海の霊力の象徴である海藻が刺激を与えなければ稲が実らないという信仰が根底にあった為ではないか。同様の例として，宇佐神宮の御田植え祭でも，斎田の中央に御幣と並べてワカメが吊るされる。対馬の赤米神事では，赤米俵に「ネズミ藻（ホンダワラ属のウミトラノオ）」をさしこみ海水を注ぎかけることによって，赤米の神が誕生するという伝承がある』（一部著者改）。

ホンダワラ類には米粒に似た気胞があって，五穀，特に稲の豊穣を祈って飾る習慣がある。しかし，ホンダワラ類は近年に至る迄，カリウムやミネラル肥料として特に重要で，与えると作物は格段に良く生育した。また，家畜の飼料としても利用された。海の神を祀る宗像大社の，五穀豊穣を感謝して祝う古式祭で「ゲバサモ」が祭壇中央に供えられ，御座で食べられるのは，「ゲバサモ」が五穀に生命を与え生長を促す海藻として尊ばれ神聖視されて来たからであろう。

アカモクを用いる古式祭は，上記の様に約850年の伝統を持つが，九州北部は縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡も多い。3世紀末に成立した魏志倭人伝には，倭人の男は入れ墨をして海に潜って漁をする（石原 1985）ともある。その胸形族とアカモクとの関係は，稲作文化が伝わった弥生時代に迄さかのぼるのかも知れない。

「ゲバサモ」と言う方言は，日本海側の東北から中国地方で使われるホンダワラ類を意味する方言「ギバサ」と，朝鮮半島南西部で使われるホンダワラ類を意味する「mol」と同語源で，長崎県の壱岐・対馬や福岡県西北部で使われる「モ」（濱田2008b）との合成語と解釈出来る。宗像地方が，方言的に「ギバサ」圏と「モ」圏と合わさった地域なのかも知れない。

Ⅳ. 福岡県・宮地嶽神社の鎮火祭

1．宮地嶽神社の古宮

神功（じんぐう）皇后は，第14代仲哀天皇妃で第15代応仁天皇の母である。恐らく4～5世紀にかけて実在した女性だと思われる。仲哀天皇崩御の後，新羅に遠征し勝利したので，「朝鮮もなびく後家盛り」などと言われ，軍神として西日本随一の人気を誇る。彼女を祀る神社は多く，福岡市と宗像（むなかた）市の間の福津市にある宮地嶽神社もその一つである。神社から30分ほど山道を登ると，やや平坦な山頂があり，昼でも薄暗いその中央に，とても小さな鳥居と祠がある（図15)。宮地嶽神社の古宮で，由緒書きには，『今を去る千六百年余り前，息長足比売命（おきながたらしひめのみこと，神功皇后）は，この宮地嶽山頂に於いて八百万の神々に「天命を奉じて彼の地へ渡らむ　願わくば開運を垂れ給え」と祈願され大陸へ出帆されました。皇后の余りにも有名不可思議な御偉業を称え，ここに御祭神として祀り宮地嶽神社が創建されました』とある。

2．宮地嶽古墳（不動神社）と神仏習合

古宮を下ると，宮地嶽神社からは上方数百mの一帯に「奥の宮八社」がある。その中の1つ，不動神社は6世紀末～7世紀初めの古墳で，江戸時代の山崩れで発見され，今は国の指定史跡となっている（図16)。古墳の前に赤屋根の拝殿があり，内部はうす暗い。奥を覗くと縦横高さが各数mの巨石が左右を囲み，全長23ｍという横穴式の石室の奥に祭壇が置かれ，前には神様が降り立つ依代（よりしろ）の御幣や鏡がある。内部構造は，奈良県明日香村の石舞台古墳に似ているが石舞台より1ｍ長く，全国第2の規模という。被葬者は，宗像族の首領で，宗像大社大宮司家の祖，しかも娘を天武天皇に嫁がせ高市皇子（たけちのみこ）を外孫に持つ宗形徳善と推定されているが，宮地嶽神社の浄見譲宮司は「宗像大社から遠く離れたこの地に何故，宗形徳善を埋葬するのか？」と疑問を呈しておられる。

図15　宮地嶽山頂の宮地嶽神社古宮。

図16　宮地嶽神社摂社の不動神社。1741年に発見された横穴式の円墳。被葬者は7世紀の豪族の宗形徳善と推定され，多くの重要文化財・国宝が出土した。

宮地嶽神社から宗像大社への田舎道には数十の古墳群がある。海人族が住み，漁業や海軍力に秀で，朝鮮・中国との交易が盛んで，農地にも恵まれたこの地は，天皇家や蘇我氏に匹敵する力を持った大豪族が支配した。

3．宮地嶽神社の大祓式，除夜祭と鎮火祭

不動神社を降りて宮地嶽神社の境内に入ると，出雲大社神楽殿のものと同じぐらいだろうか，日本一という大注連縄（しめなわ）を飾った拝殿（図17）が見え，奥に本殿がある。本殿・拝殿・楼門・社務所などは，昭和初期に建てられたそうだが，いずれも大きく立派である。

境内，本殿に向かって右側（南側）には緋寒桜の大木が大きく茂り，花が咲けば美しそうだ。その緋寒桜の拝殿寄りに，四隅に竹を建て細い注連縄を張った10ｍ×7ｍ位の長方形の斎場が設置されていた（図17)。斎場には海に向かって祭壇が設けられ，数々のお供えが置かれていた。

祭壇に向かって左側には，鎮火祭で使われる，真水を入れた直径約30㎝の銅製の瓶（かめ），ホ

図17　大晦日午後の宮地嶽神社の拝殿と鎮火祭の為の斎場。

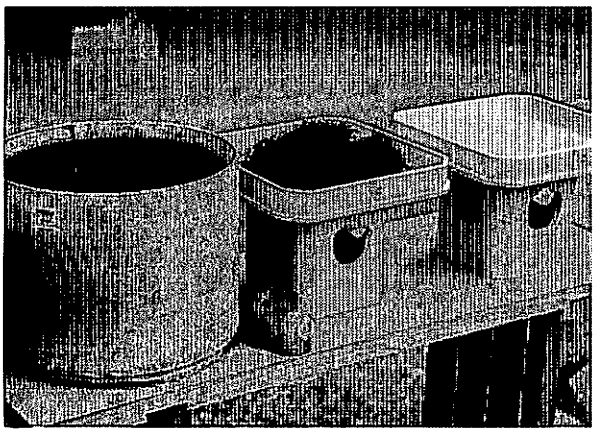

図18　鎮火に使われる，左から真水，宮地浜で採ったジョロモクと海砂。

ンダワラ科のジョロモクを山盛りにした三宝，砂を盛った三宝が台の上に置かれていた（図17，18）。

大祓式・除夜祭・鎮火祭は，昔は旧暦大晦日に行われたが，今は新暦大晦日の午後5時から順次行われる。地元の消防団員数人と約50人の氏子が集まり，儀式が始まるのを待つ。暗くなり始めた午後5時過ぎに白い衣に黒い冠，薄茶色の笏を右手に持ち，浅沓（あさぐつ）を履いた7人の神職が，若い女性の神職を先頭に，1列になって斎場に歩いて来た。斎場に着くと，まず1年の厄を祓う大祓式が始まった。1人の神職が「天岩戸を押し開き……，天の八重雲を……」などと祝詞を上げると，他の神職が遥か古代から聞こえて来たような低い声で「おー，おー」と呼応する。その後，2人の神職が麻と木綿の布を引き裂き箱に入れて大祓式が終わり，神職が交代で祝詞を上げ，除夜祭もいつしか終わった。

夕闇迫る午後5時20分頃から鎮火祭が始まり，浄見宮司が祝詞を上げた。斎場の一角に直径と深さが約30cmの穴が掘ってあり，中には松葉や松かさが入っている。点火すると，火が勢いよく燃え上がり，数十cmの火柱が立つ（図19）。宮司がたすき掛けになり，その燃え上がった火に，最初は水をかけ，次にジョロモクを被せると，もうもうたる煙が立ち上がり，吹き寄せる。その後，神職さんが砂をかけ，最後に残った水を全部かけると，煙も治まり完全に鎮火した。鎮火祭自体は10分程で終わってしまった。

その後，斎場の周りで見守っていた数十人の人々が，半紙に包んだ約2cm四方に細かく切った紙片を受け取り，皆がそれを自分の体にかけて今年一年の厄を祓い身を浄めた。その後，浄見宮司が年末に際して，「今年1年暗いニュースが多かったが，宮地嶽神社の神様のご加護で，来年は皆さんにとって良い年になりますように」という趣旨の話をされた。終わると，神職の方々が先程の女性神職を先頭に一列に並んで引き上げたが，我々や参詣人は並んで神子（みこ）さんから白酒を頂いた。日没の遅い福岡ではあるが，いつしか大晦日の日も落ち，境内はとっぷりと夕闇に包ま

図19　鎮火祭で火が燃え上がり，水をかけるところ。この後，順次，海藻，砂，最後にもう一度水をかけて完全に鎮火させる。

れた。

4．地域と海藻との関わり

神社の急な階段を降りて数個の大鳥居を潜り抜けると，約1kmの参道が一直線に宮地浜の海岸に至る。浄見宮司によれば，宮地嶽神社も昔は海がすぐ近くまで来ていたそうだ。下関市の住吉神社，北九州市門司区の和布刈神社，福岡市東区の香椎宮，同区志賀島の志賀海神社などは大体海の近くで海の神様を祀るか，創建が神功皇后に起源するのが特徴で，宮地嶽神社も本来は海の神様を祀ったそうである。神功皇后が祈願したのも戦勝と航海の安全であった。

ホンダワラ類は古来沢山採れた。ホンダワラ類は，既に述べた様に，島根県や福岡県では身を浄めるお祓いに使う。また，例えば同じ福岡県の志賀海神社では，砂で身を浄める。従って，鎮火祭では，水・海藻・海砂を使って火魔を祓い，火を鎮めるという考えが出たのだろう。実際，出火の際，昔の人は，水の他に砂や海藻をかけて火魔を鎮め，厄を祓ったのかも知れない。日本の古社の神事には古代人の生活や哲学，信仰が残っている。

神社周辺では，伝統的に，アオサ（アオノリ）を味噌汁に入れる。寒天に似たオキュウト（エゴノリ）も名古屋のキシメンよりやや太めに切って毎朝食べる。トコロテン（テングサ・マクサ）も食べるが，オキュウトの方をよく食べるそうだ。実際，志賀島の簡保の宿に泊まると，オキュウトを出された。

V．和布刈神事（めかりしんじ）

古来，日本では海藻は食用であった。我々をとりまく自然と祖先を崇拝した我々の先祖は，我々が食べる海藻は神様も食べられるし，清浄であると信じた。その中で，ワカメは万物に先んじて旧暦正月には芽を出して成長し，自然に繁茂するので幸福を招くとされた。縁起物で，新年の祝賀行事として重んじられ，神前に捧げてその年の無病息災，海上安全を祈る神事に用いられた。それが和布刈神事で，山陰から福岡県北部の古社で行われたようだ。今日でも，日御碕神社（島根県出雲市），住吉神社（山口県下関市），和布刈神社（福岡県北九州市）の様な1600年以上続く古社では続いている。

ここでは，これらを紹介して比較し，古代日本人の宗教観，自然観，ワカメ食文化と，その歴史的意味について考えたい。

1．出雲國・日御碕（ひのみさき）神社

1）神社の由緒と祭神

日御碕神社（図20）へは，松江から一畑電鉄で約1時間，終点の出雲大社前で降り，バスに乗り換え北西へ数kmである。陸路が不便で，つい30年ほど前までは小泉八雲（1894）のように，出雲大社近くの稲佐（いなさ）の浜から日御碕神社まで舟を使った。神社近くには1903年に建立された日本一の高さ（43m余）を誇る出雲日御碕灯台がある。

宮司は神代以来代々小野家で，現宮司，小野高慶氏は98代目。1代25年とすると，2450年前に神社が創立された事になる。天平7年（735年）聖武天皇勅書に，伊勢神宮は日出所宮（ひいずるところのみや）で日の本の昼を守り，日御碕神社は日沈宮（ひしずむのみや）で日の本の夜を守るとあり，中央の尊敬を集めた。現社殿は徳川家光の命により建てられ，重要文化財である。このように辺鄙な田舎に竜宮城のように立派な，格式のとても高い古い神社があるのは驚きだが，昔は海上交通が大きな役割を占め，波風が穏やかで水深のある奥まった湾は天然の良港で文化伝搬の基地であった。祭神は，正面奥の日沈宮に天照大御神（あまてらすおおみかみ），手前右上方の神の宮（かむのみや，上の宮）には古事記に新羅に行ったとある素戔嗚尊（すさのおのみこと）を祀る。奥には素戔嗚尊の墓，隠ケ丘があり，全国の素戔嗚尊を祀る神社の総本社である。摂社に韓国（からくに）神社があり，素戔嗚尊と五十猛尊（いそたけのみこと）父子を祀る。末社の熊野神社に，伊弉冉尊（いざなみのみこと），事解男尊（ことさかおのみこと），速玉男尊（はやたまおのみこ

図20　日御碕神社（重要文化財）全景。右は門，中央は拝殿，左奥は日沈宮（ひしずむのみや）。隠れているが，門の右上方に神の宮がある。

と）を祀る。

2）神事の起源と内容

社伝によると，13代成務天皇6年（西暦150年頃，古代の年代は丁度200年ずれるので，実際には西暦350年頃と推定される）正月5日早朝，1羽の鴎（かもめ）が未だ潮の滴る海藻を口にくわえ来て神社の欄干に掛けて飛び去ること三度，これを見た社人は不思議として直ちに浄水で洗い神前に供えた。この海藻が和布（め，ワカメ）で，和布刈神事の起源であり，出雲地方ではこの日からワカメ漁が解禁になる。

2002年旧暦正月5日，新暦2月16日土曜日，私は神社の許可を得てこの神事を見せて頂いた。神事に先立ち，朝10時から日沈宮（下の宮）で男性数人，女性一人の神職による神事が行われた。まず，米，酒，塩，水，魚（ブリ），野菜，果物の常饌（じょうせん，神様の日常の食べ物）と，新ワカメを三宝に載せて男性神職数人が順次神前に運んで供える。昔は，キジなども供えられたそうだ。次いで，小野宮司が祝詞（のりと）をあげる。その意味は，「そのお名前を申すのさえ恐れ多い天照大神と，同じ本殿に住まわれる五人の男神に，宮司小野高慶が恐縮して申し上げる。昔，今月の今日，沖のカモメがワカメをくわえ来て，それを神様にお供えした故事により，今日ワカメをお供えしますので召し上がって下さい。こうしてご奉仕しますので，これからも天皇の御代を末永く祝い，氏子や崇敬者をも桑の枝の如く栄えさせ，奉仕させて下さい，と恐縮して申し上げます」となる。この間，時折，男性神職が笛・鉦（かね）・鈴を，女性神職が直径約1mの大太鼓を鳴らし，波の音を模した楽を奏し，祝詞が終わると再び男性神職が常饌を順次下げた。その後，素戔嗚尊を祀る神の宮でも，同様の神事が行われた。

午後2時，小野宮司を先頭に4人の男性神職が本社から約1km離れた宇竜（うりゅう）港に着く。港の先の権現島（図21）は周囲約500m，標高約30m。島の頂上には日御碕神社末社で，伊弉冉尊を祀った熊野神社がある。港には，1年12ヶ月に因み，クジに当たった12人の船頭が自分の漁船を汀に漕ぎよせ，港と権現島の間に2本の綱を張り，その間に12隻の船を横に並べて舟橋を作り，日章旗や大漁旗で飾り，斎竹を立てる。神職達が渡島の際は，裸役という数名の若者が寒空に赤い下帯一つとなり，乗船用の板橋を支え，神職達の乗船を助ける。この舟橋に神職4人，地区長，氏子代表など約25人が次々と乗り，最後

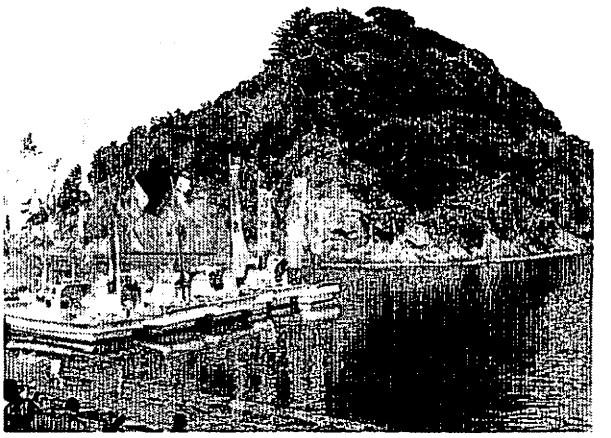

図21　和布刈の行われる権現島と舟橋の和布刈神事当日の様子。例年は12艘の舟が参加するが，今年は6艘に減少した。

に私が乗った。権現島は，つい数年前まで女人禁制で，女性記者でも，島に渡る事はおろか船橋に乗ることさえ出来なかった。島に渡る人皆が船に乗り終わり，対岸の権現島に最も近い沖一番の船に神職4人が移動して着座すると，船頭が美声で朗々と船歌を唄う中，各漁船の両端を繋いだ2本の綱を引き寄せ，浜から約50mの権現島にスルスルと船橋を移動して着けた。その後，裸役が神職達の乗船や渡島を助ける（図22）。

権現島に着いて一の鳥居に拝礼し，山道を登る

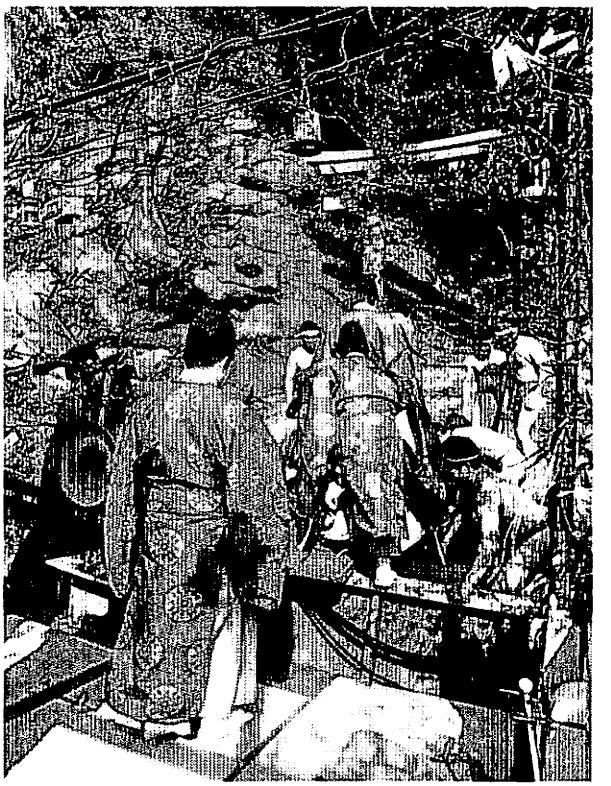

図22　神職の権現島への上陸を助ける裸役。

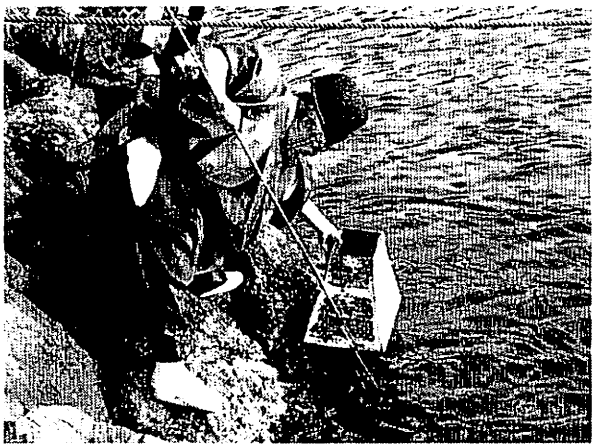

図23　熊野神社で祝詞を上げた後，島の出入口，一の鳥居前で和布刈（めかり）を行う日御碕神社禰宜（ねぎ）の高木玄明氏。

と，2～3分で山頂の熊野神社に着く。熊野神社では，奏楽の内に常饌と今年の新ワカメを供え，12隻の奉仕船に授けられる大漁と海上安全の御神札を献じ，宮司と禰宜が大漁祈願の祝詞をあげる。町長・氏子代表・大船頭代表等が次々に玉串を捧げて拝礼の後，島を下る。神職達が一の鳥居前に降りて来て，地元の人多数が見守る中，禰宜がワカメを刈り，他の神職の持つ三宝に載せる（図23）。神職達が宇竜港に最も近い灘一番の船に戻って着座すると，船歌の中，網を引き寄せ船を宇竜港に着ける。その間に裸役は，権現島から海に飛び込み，港に先に泳ぎ着き，神職の上陸を助ける。裸役は女性に人気が高いが，これは古来日御碕では男の海人に依る潜水漁が盛んだった事（出雲國風土記 733）を示しているのだろう。この和布刈神事が終わると，出雲も次第に春に向かう。

3）日御碕漁業の歴史

出雲國風土記（733）には，「宇礼保浦（うれほうら，宇竜港のこと）幅七十八歩あり。船二十ばかり泊まつべし。すべて北海（日本海）の産物は，隣の楯縫（たてぬい）郡同様である。但しアワビは出雲郡が最も優れ，（日）御碕の海人（あま）是を捕る」とある。今日ではアワビが採れなくなったようだがサザエが名物で，その餌となるアラメ，カジメ，ワカメなどが豊富で，出雲國風土記（733）の記述を裏付けている。

2．長門國一宮・住吉神社の和布刈神事

1）住吉神社

住吉神社（図24）はJR新幹線の新下関駅から南東へ約1 km，徒歩約20分。一の宮のバス停から山側へつま先上がりに歩くと，左手に境内の池が見えてきて美しい。

境内中央には小さいが美しい太鼓橋があり，奥の階段を30数段登ると明るく開けて，古い建物が並ぶ。正面手前に毛利元就が1539年に寄進した重要文化財拝殿。奥には大内弘世が1370年に再建した，長屋のように横に五棟連なる国宝本殿が建つ。向かって左から，西第一殿に住吉大神（表筒男命【うわつつのおのみこと】，中筒男命，底筒男命の三神），西第二殿に応神天皇，中第三殿に武内宿禰（たけのうちのすくね）命，東第四殿に神功（じんぐう）皇后，東第五殿に建御名方（たけみなかた）命を祀る。

2）和布刈神事の由来

記紀や社伝に依ると，第14代仲哀（ちゅうあい）天皇は，九州で勢力の強い熊襲（くまそ）征伐の前に，熊襲と通じていた新羅をまず攻めよという神のお告げを聞かず，神罰が当たり西暦200年（史的には西暦400年と推定）2月6日に亡くなった。幼児から聡明で美しく，この時第15代応仁天皇を懐妊中だった神功皇后は，同年9月10日，出産は帰国してからにして欲しいと，腰に石を挟んで祈願し，新羅に遠征した。新羅に着くと大津波が起り，新羅王は恐れて降伏した。皇后は勝利を納め無事帰国。12月14日に応仁天皇を筑紫の宇美（うみ，元は産み）八幡神社で出産。穴門山田邑（あなとやまだむら，現在の下関市一宮）に住吉神社を創建し，神主踐立（かんぬしほむたち）に命じて早鞆瀬戸（はやとものせと，関門海峡）のワカメを元旦未明に刈り採らせ（図25），自ら神事を執り行い，ワカメを神前に捧げた。これが住吉神社と門司の和布刈神社の和布刈神事の由来で，1600年以上続く。

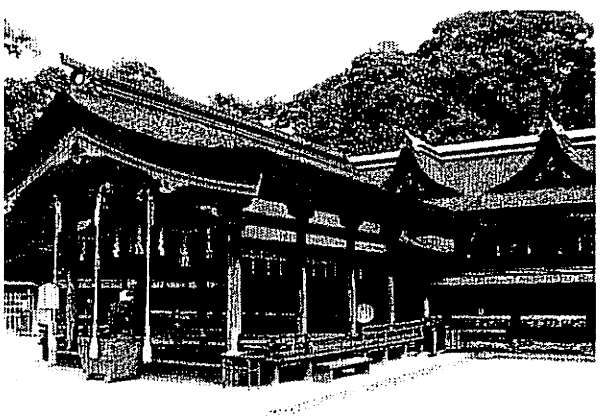

図24　住吉神社の本殿（奥，国宝）と拝殿（手前，重要文化財）。

図25　住吉神社の和布刈神事古図（住吉神社の資料に依る）。

因みに摂津國（大阪市）の住吉大社の住吉大神は和魂（にきみたま）と言い，船の方向を決め，にきめ，と言われたワカメが依代（よりしろ，神様のとりつく所）。一方，長門國一宮・住吉神社の住吉大神は荒魂（あらみたま）と呼び，船の操縦を決め，アラメが依代という。

3）神事の内容

神事は旧暦大晦日（旧暦では，日の出とともに1日が始まったので，1月1日未明は大晦日である）午前1時，拝殿で神職数名が和布刈の無事を祈願する祝詞を詠んで始まる。次いで，禰宜が燧（ひきり）で火を起こして提灯に移し，更に境内で松明に火を移す。2時過ぎ，衣冠束帯姿の神職3名と，地下足袋に藁草履をはき，予備の草履を腰にぶら下げ，法被を着た供奉員（ぐぶいん）十数名が松明の火を燃やし継ぎ，山間の和布刈道を1時間以上歩き壇ノ浦に向かう。旧暦1日は月がない。往復4時間近い照明は松明1本を燃やし継ぐ。供奉員各自が1本ずつ用意する松明は，枯竹を4つに割り，直径20～30cm，長さ3～4mに束ね，竹の中には近くの山で掘り起こした100年を超えるクロマツの切り株，肥松（こえまつ）を鉛筆の様に細く切って忍ばせた。肥松は多量の松脂を含み，竹に混ぜると火が消えず長持ちした。

午前2時半頃，壇ノ浦に着く。干潮で露出した海濱火立岩（うみはまほたていわ，長さ3m，幅2m，高さ1.5m程の岩）の前で，火を焚き暖と明りを取り，全参加者十数人が餅を焼いて食べる。海濱火立岩に土器（かわらけ）を数枚置き，その上に米，餅，酒を供え，海に向かって宮司が祝詞を上げ，和布刈の安全，航海の安全，豊漁などを祈願する。

午前3時過ぎ，約780m離れた対岸の門司の和布刈神社とほぼ同時刻に和布刈が始まる。旧暦正月1日は新月で，太陽・月・地球が一直線に並ぶ。和布刈の行われる午前3時頃は，一年最大の干潮となる。潮流は速いが，漸深帯に生えるワカメ刈りに最も適した時間である。和布刈供奉員十数人は，松明の明かりを頼りに約30分，多量のワカメと少量のアラメを刈り採り，シュロ縄で編んだ和布入れ篭に入れて復路に着く。

余談だが，上記のとおり，住吉神社の和布刈神事は今でも一般の人は神事を見てはならず，もし見ると目がつぶれると言い伝えられ，当夜は街道筋の家は堅く雨戸を立てて神事を見ない。宮司さん御自身も赤間神宮に居られた時は，目の前で神事があったのに見なかったそうだ。ところが，供奉員の一人が海峡の沖までワカメを探しに行ったところ，海上保安庁の人がどこかで監視していて，関門海峡中に響きわたるような大型スピーカーで，「危険なので浅瀬に戻りなさい」と注意したのには驚いた。目は大丈夫だったのだろうか？

昔はこの神事が済む迄は，ワカメを刈れなかった。現在では，昔の山道も国道や県道，高速道路などが出来，交通量が激しくなって危険で，車で移動している。しかし，壇ノ浦に着くと，昔通りの神事が行われる。どんなに荒天の夜でも，神事の時だけは穏やかになると伝承されるが，実際，私が参加した時，珍しく吹雪であったのに，壇ノ浦に着いて神事を行って居る時だけ風雪が止んだのは不思議であった。

4）献備祭（けんびさい）

神社に戻り，拝殿前で宮司以下和布刈参加者全員が拝礼し，和布刈の無事を報告，住吉大神に感謝する。その後，参加者は社務所奥の座敷に集まり食事（直会）をする。

午前6時頃から神職6人全員と氏子数人が参加し，拝殿と本殿で献備祭が厳かに行われ，ここからは公開される。笛や太鼓が鳴り，宮司らが祝詞をあげ，刈り採ったワカメとアラメの他，昆布，大根，ゴボウ等の神饌を，生の梅の小枝を箸とし，本殿第一殿の住吉大神に供える。夜が明ける午前7時前に献備祭は終わる。

ワカメは献備祭の後，近隣の氏子達が旧正月の雑煮や味噌汁に入れて食べるが，アラメは食べない。また，社務所の前では氏子の婦人部の人達が参詣者に甘酒を用意し，また農具，植木などの市も立ち，旧正月を祝う参詣者で終日賑わう。

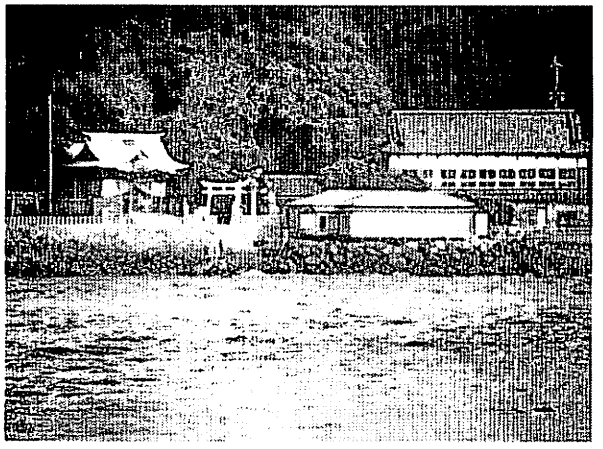

図26　関門海峡を挟んだ対岸の壇ノ浦から見た和布刈神社全景。中央石段下の灯籠の左側が和布刈の場所。

図27　和布刈神社の和布刈（めかり）の様子。

3．豊前（ぶぜん）・和布刈神社の和布刈神事

1）和布刈神社

和布刈神社（図26）は，関門海峡を挟んで壇ノ浦の対岸，北九州市門司区にある。住吉神社同様，西暦400年，神功皇后創建と伝わり，関門海峡に接して境内が広がる。祭神は比売大神（ひめのおおみかみ，天照大神），日子穂々出見神（ひこほほでみのかみ，神武天皇の祖父），鵜草葺不合神（うがやふきあえずのかみ，神武天皇の父），豊玉比売神（とよたまひめのかみ，鵜草葺不合神の母），安曇磯良神（あずみいそらのかみ，海事を司る神）の5柱。

明治以後，和布刈神社の社格は県社で，国から宮司が派遣されず，豊前小倉藩家臣高瀬家が従前どおり宮司を勤めたため，社伝や古文書が多く残る。醍醐天皇皇子重明親王の日記「李部王記」に「元明天皇和銅3年（710）豊前國隼人神主和布刈御神事の和布を奉る」とあり，神事が少なくとも1300年以上前には行われていた事が確実とされる。

2）和布刈神事

神事は，冬至の和布（め）繁茂の祈念祭で始まる。旧暦12月1日には，予備を含め松明を2本作る。神職は神事の1週間前から別火（べっか）に入り（家族とかまどを別にすること），潔斎する。旧暦元日午前0時頃，拝殿前でホダ木を焚き，拝殿内で横笛，太鼓，擦鉦（すりかね）で雅楽を奏で，祝詞をあげ，豊前神楽を舞う。この神社の神饌は，全国的にも珍しい熟饌（煮炊きをした神様の食べ物）で，健康祈願のために，力の飯（いい，固く握ったご飯），福噌（ふくぞう，味噌と大根を炊いたもの）と歯固（はがため，5 cm角の大根を15個に切ったもの）を，また，三種の神器を意味する鏡餅（鏡の意味），菱（剣），なまこ（曲玉）をウラジロとユズリハを敷いた三宝の上に載せ神前に供える。

午前3時頃，3人の神職が和布刈を行う。一人が約3 mの松明にホダの火を付け足下を照らし，宮司が鎌でワカメを刈り，他が刈り採ったワカメを手桶に入れる（図27）。関門海峡は流れが速く早鞆（はやとも）の瀬戸と言うが，約1時間，全身ずぶぬれでワカメを刈り，元朝（としのはじめ）の神供とし，天皇家，小倉藩主小笠原家や近隣諸侯にワカメを献上した。摂津守や毛利元就からの受取書も見せて頂いた。

住吉神社同様，和布刈神社の和布刈神事も以前は秘事であったが，昭和21（1946）年に公開された。

4．和布刈神事の意味

ワカメは，日本各地，朝鮮半島南岸と東岸，中国旧満州南部，ロシア沿海州などに産する極東の海藻である。古代，朝鮮・北九州・北陸地方は環日本海文化圏を形成し，ワカメ食はこれらの地方に共通する古い文化である。万物に先立ち清浄な正月の海に生れ，大きく繁茂するので，一年の幸福を招くとされ，祝賀の意味を持つ縁起物であった。このワカメを正月に神前に供えて豊漁と航海の安全を祈り，お下がりを食べて身を浄め，ワカメ漁解禁の日とすることは，3社の和布刈神事に共通する。しかし，3社の和布刈神事は異なる点も多く，日御埼神社と和布刈神社では神職がワカメを刈る。住吉神社でも古図（図25）にあるように，昔は神職が刈ったようだが，今は和布刈供奉員がワカメを刈っている。

日御碕神社では，旧暦正月5日の昼に神事が行われ，地域住民も参加する。ここには朝鮮と関係

の深い素戔嗚尊の墓があり，境内には韓国神社もある。神事開始期，古代朝鮮の新羅，加羅との関係が深かったのであろう。

一方，住吉神社と和布刈神社の和布刈神事は，旧暦正月元旦未明（旧暦では大晦日の深夜）に行われる秘事である。関門海峡では旧暦正月1日午前3時頃が1年最大の干潮で，ワカメを刈りやすい。秘事の理由は，神功皇后の出産と関係し，和布刈に新生命誕生の意味付けをしたのかも知れない。また，新羅に勝って軍神となった神功皇后に後世，戦勝祈願の意味を込めたのもあるだろう。前年・今年・来年は，前世・今世・来世に繋がり，深夜未明がその接点であった。これは朝鮮半島では祖先の霊を迎えて祀る祭事（チェサ）が未明行われたり，古代朝鮮百済系とされる天皇の即位や葬式が深夜行われる事とも共通した考え方であろう。

ワカメは，カルシウム分が多く栄養価に富み，朝鮮（韓国）では古来，妊娠・出産・授乳時にワカメスープ（ミヨックッ）を大量に食べる。ワカメ刈が，神功皇后の妊娠・出産・授乳期に行われたのは，朝鮮との共通性が感じられる。

関門海峡は古来交通の要所で，和布刈神社西南数kmの厳流島から門司港との間には朝鮮の船が着き，港が栄えた。樟葉（くずは，葛葉，百済），白木崎（新羅崎。最近，風師に変更），小森江（こもりえ，高麗入江）等の地名が残り，住吉神社周辺（新下関駅近く）同様，朝鮮系の子孫が多いという（和布刈神社宮司・高瀬家信氏私信）。

Ⅵ. まとめ

海藻を使った神事の調査は，古代日本人の生活や海藻に対する思いを再現する。古代文化を理解し，その起源を探る上で貴重な手がかりとなる（濱田 2007a, b, 2008a, 2009）。

佐太神社など島根県の古社では，忌明けの参拝の際，ホンダワラ類でお祓いをする風習がある。佐太神社で最古・最重要の御座替神事は平安時代以前に始まったが，ホンダワラ類でお祓いをし，その翌日行われる例祭ではホンダワラ類を使わず大麻（おぬさ）を使う。佐太神社周辺には縄文前期から中世に続く100を越える遺跡があり，その文化は縄文期から連綿と現代まで続いて来た。これらから，大麻の起源はホンダワラ類で，後代，海が遠くなった佐太神社周辺でも便利な大麻に代わったと推定される。

福岡県北部の宗像大社では，約850年の伝統を持つ古式祭が12月中旬に行われ，その年の収穫を感謝する。古式祭では早朝，大勢で食事を共にする御座（おざ）があるが，その際，「ゲバサモ」（ホンダワラ属のアカモク）が神饌として神様に供えられ，御座の食事にも供される。海産の「ゲバサモ」が五穀豊穣を祝う神事の中心に置かれるのは，『ゲバサモ』を食べて，心身を浄め，祓う意図からであろう。また，気胞を持つホンダワラ類が稲穂に似ているだけでなく，古来，農作物の幼苗に海藻が生命を与え，生育を促す肥料として重要だったからかも知れない。

宗像大社における「ゲバサモ」の呼称は，この地方がホンダワラの方言の「ギバサ」圏と「モ」圏の境界を示している様で興味深い。

宮地嶽神社で大晦日夕方に行われる鎮火祭でもホンダワラ科の海藻が使われる。火の魔，火災の災厄を鎮め，浄めて祓う力をホンダワラ等の海藻に求めたものと思われる。

和布刈神事は，山陰地方から北九州にかけて，現在少なくとも三つの神社で行われている。いずれも1600年以上続く神事で，出雲日御碕神社では旧暦正月5日の昼，下関市の住吉神社と北九州市門司区の和布刈神社では，旧暦正月1日未明にワカメを刈って神前に供え，その年の豊漁，航海の安全，無病息災などを祈り，新年の祝賀を表し，ワカメ刈りの解禁日としている。

このように，日本の神道では，海藻は食物としてだけでなく，お祓いや祝賀など，精神的，宗教的な意味を持っていた。

謝　辞

本研究では，佐太神社，鹿島歴史民俗資料館，宗像大社，宮地嶽神社，日御碕神社，住吉神社，和布刈神社の関係者に大変御世話になった。京都大学の鰺坂哲朗博士，東邦大学の吉崎誠博士，国立科学博物館の北山太樹博士には，海藻の同定をして頂いた。IDDの木村光子氏には一部の仕事を分担して頂いた。これらの方々に心から感謝したい。なお本稿は，木村・濱田（2009），濱田（2007, 2008a, b）を省略改稿し，宮地嶽神社の項目を新たに加えたもので，2009年8月に行われた国際藻類学会（IPC9）でも発表された内容である。

参考文献

石原道博（編訳）1985. 新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝. 中国正史日本伝（1）pp.45, 79-80, 108. 岩波文庫. 岩波書

店.
出雲國風土記 733（秋本吉郎 校注 1958）. 風土記. 198-199. 日本古典文学大系. 岩波書店.
太安万侶・稗田阿礼 712. 古事記.（次田真幸 訳注 1977上巻 pp.80-86）. 講談社学術文庫.
太安万侶・稗田阿礼 712. 古事記.（倉野憲司 校注 1958. 古事記 祝詞. pp.76-79）. 日本古典文学大系. 岩波書店.
鹿島町教育委員会 2001. 鹿島の遺跡小集.
木村光子・濱田 仁 2009. 宗像大社の古式祭とアカモク. 藻類 57: 7-9.
楠本 正 2008. ふるさとの歴史④「ゲバサモ」のこと. つりかわ11月号.
小泉八雲 1894. 日本瞥見記上（平井呈一 訳 1975）, 口絵写真, 同12章 日ノ御碕. 恒文社.
舎人親王 720. 日本書紀.（坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注. 日本古典文学大系 上巻 1967, pp.107-110, 332, 下巻 1965, p.410）. 岩波書店.
バード, イザベラ 1897. 朝鮮紀行.（時岡敬子訳 1998）. 講談社学術文庫.
濱田 仁 2002. もっと藻の話 第26話. 実業之富山 2002年6月号.
濱田 仁 2007a. 大連大学 第二回中・日・韓日本言語文化研究国際フォーラム.
濱田 仁 2007b. 和布刈神事（めかりしんじ）. 藻類 55: 218-222.
濱田 仁 2008a. お祓いの起源ホンダワラ類と出雲の佐太神社. 藻類 56: 35-38.
濱田 仁 2008b. 日韓共通の海藻名：モ（藻）とモル（mol）, ソゾとソシル（sosil）について. 藻類 56: 83.
深根輔仁 918. 本草和名.
藤原時平・藤原忠平（編）延喜式 927.（黒板勝美編 1974）. 新訂増補国史大系. 延喜式. 吉川弘文館.
Stiger, V., Horiguchi, T., Yoshida, T., Coleman, A.W. and Masuda, M. 2003. Phylogenetic relationships within the genus *Sargassum* (Fucales, Phaeophyceae), inferred from ITS-2 nrDNA comparisons of material collected from the Pacific basin, with an emphasis on the taxonomic subdivision of the genus. Phycol. Res. 51: 1-10.

講師略歴

1968年　京都大学農学部農林生物学科卒業
1970年　京都大学大学院農学研究科修士課程修了
1973年　京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得
1975年～1977年　米国ペンシルバニア大学生物学科ポストドクトラルフェロー
1978年　京都大学大学院農学研究科博士課程退学
1978年～1980年　仏教大学非常勤講師（生物学）
1978年5月～1980年3月　大阪大学微生物病研究所研究生
1979年1月　京都大学農学博士
1980年4月　富山医科薬科大学医学部助手
2007年4月　富山大学医学部助教（現在に至る）